

2020年3月期 第2四半期 決算電話カンファレンス 主な質疑応答記録

日時： 2019年10月31日(木) 12:00 ~ 13:00

出席者：代表取締役 社長執行役員 横田 浩
取締役 常務執行役員 経営企画本部長 杉村 英男
広報・IR グループリーダー 小林 太郎

1. 上期実績、通期予想の個別要因について

Q.1 直近の石炭価格は下がっています。石炭の在庫量、上期下期の石炭価格の予算数字および損益への寄与を教えてください。

A.1 石炭の在庫は 20 万トン前後の数量で推移しています。石炭価格は、期初の設定はトン当たり約 \$105、上期はほぼ予算並みに推移しました。下期の石炭価格の設定は 12 月までは \$ 75、1 月以降は \$ 80 としました。収益への影響は、前年同期比で上期は 1 億円のマイナスとなりましたが、下期は 30 億円の増益を予定しています。

Q2 化成品の苛性ソーダの価格と数量を国内、輸出別に分けて教えてください。

A2 苛性ソーダの販売価格について上期の国内は概ね前年並みを維持できましたが、海外は市況が弱含みで推移しトン当たり 300 ドル前後となっています。下期は、国内は価格をキープできるとみっていますが、海外は上期並みを予想しています。数量については概ね下期も上期並みを維持できるとみえています。輸出は、上期の輸出比率は 17% でしたが、インドの輸入が再開されたこともあり、下期の輸出数量は若干増える傾向にあるとみえています。

Q3 特殊品の 2Q(7~9 月) 損益が 1Q(4~6 月) 比で悪化している理由を教えてください。

A3 CMP 向けシリカの需要が 1Q、2Q と低調だったことと、7 月以降、半導体製造装置向けの窒化アルミの販売数量が減少したためです。

Q4 特殊品は昨年 99 億円の年間営業利益が今回の修正予算では 75 億円となっています。下期が減益となっている要因は何でしょうか。

A4 乾式シリカが低調です。上期は韓国向け輸出で、お客様都合による在庫積み増しがあったためことなどで出荷できましたが下期は厳しい状況です。さらに乾式シリカは中国においてシリコンのフィラーとしてかなり多くの量が使われていますが、これも米中の貿易摩擦の影響で雑貨向けを中心に低調です。もう一つは、窒化アルミニウムの半導体製造装置向けの販売数量が減少しています。

Q5 上期のポリシリコン出荷数量は予算比 10% 減でしたが、期初予想だと昨年 10% 増でした。年間数量は予定通り出せるのかどうか。合わせて価格についてもどのように推移したのか教えてください。

A5 数量については、契約のある客先は基本的に数量を確保できるものの、1 割ほどあるスポット的な契約の客先が軟調のため通期では前年並みになると考えています。価格については契約通り、期首予想値を維持できています。

Q6 ポリシリコンの汎用グレード向けの販売は厳しいでしょうか。

A6 懸念しているところで、当社はハイエンド用途にフォーカスして行きます。ハイエンドのユーザーは多結晶シリコンの価格だけでなく、品質も評価していただけます。いずれ伸びてくる需要を捕え、数量を増やして行きます。

- Q7 4~6月に弱かった電子工業用高純度 IPA は日本国内と台湾での販売数量に変化はありますか。
- A7 台湾向けは7月後半位から IPA の出荷数量が戻ってきました。10月に IPA の製造プラントの定修がありますが、お客様のプラスの要求に全量出荷したいという思いで対策を検討しています。
- Q8 LA 部門の上期の損益はフォトクロミック材料関連、診断による前年比でのプラスは6億円なので、歯科器材の販促費による2億円のマイナスがあってもプラスは4億円残るはずだが、何が原因でしょうか。
- A8 昨年、大型案件のあったイオン交換膜が4億円マイナスとなっています。
- Q9 セメントの営業利益率の6%は、石炭安の影響を織り込むと低く、3年前と比べて物足りなさを感じます。これは復活への通過点と考えてよろしいでしょうか。
- A9 セメント出荷数量は、下期は上期に比べてプラスで推移すると現在見えています。大型案件も受注できており、また公共事業、特に災害復旧案件が1月以降から出てくると思っています。来期以降については地盤改良材、補修材に力を注いでいきます。これらの製品は災害復旧については役立つとみており、そういったものが寄与することで、レベル感は言えないが今よりも上振れすると期待しています。

2. CO2 排出量削減に関して

- Q10 石炭自家発電による電力がトクヤマの競争力の源泉の一つだと思っています。再生可能エネルギーの活用のためにこれを変えていくとしたいと思いついた対策・判断が必要かと思うが、どのくらいの時間軸、投資金額を考えているか？
- A10 バイオマスの増加は当然コストアップにつながるのですが、ボイラーの寿命を考慮しながら、どのボイラーでバイオマスをどれだけ使用するかというシミュレーションをしています。バイオマスを燃料に使うためには設備投資も必要となります。一方で、バイオマスの増加によるコストアップをどの程度まで事業上許容できるかの兼ね合いもあり、年内をめどにシミュレーションを完成させ、行動計画に移していきます。
- Q11 社内で色々な検討をしているようですが、外部からは CO2 の排出量の大きさだけがクローズアップされがちだったり、対策も見えにくかったりしていたので、是非積極的に開示して頂き、今後もアップデートを重ねてほしい。
- A11 承知しました。
- Q12 徳山製造所内のエネルギーとしては蒸気活用が増えると思います。製造所のエネルギー効率の最適化という中で、どういった改善があるのか、エネルギー原単位をどう下げるのか教えてほしい。
- A12 蒸気の活用でコージェネレーションを推進していくのはよい方法だと思っています。トクヤマ製造所のみならず、周南コンビナート、周南市との連携の中でのコージェネレーションの活用を進めていきたい。
- Q13 他にも宝の山のような案件はまだありますか。
- A13 現状でも近隣の一部の会社にユーティリティーの供給は行っていますが、もっと広範囲に広げることを考えています。バイオマスについては、周南市、山口県、コンビナート各社が共同で山口県の近隣の間伐材や竹を利用するコンソーシアムを設立し、地域を挙げてのバイオマスの安定調達と活用の仕組み作りの取り組みを進めつつある状況です。
- Q14 アジア各国による廃プラの輸入規制による国内の廃プラ問題はトクヤマにとってどんな影響がありますか。
- A14 セメントでは廃プラを燃料代替で使用しており、今期は対前年で使用量を増やす方向です。今後は設備投資等も必要になるが、廃プラ問題に積極的に取り組んでいきます。

以上